

「第2回東アジア若手天文学者交流会」報告

記録破りの猛暑の中、今年も「第24回天文・天体物理若手夏の学校」の中で上記交流会が韓国・中国および台湾からの参加者を迎えて行われた。来日中の交流やセッションの様子などについて報告する。

アジア地域の天文学を専攻する若手の交流を推めようという試みは、昨年度から始まりました。第1回の交流会を開催するまでのいきさつは、天文月報1994年6月号で報告しましたが、初めて読む方のためにこれまでの経緯を簡単に書いておきます。発端は1992年に韓国で行なわれた北東アジア地域研究会でした。雑談で日本の夏の学校の話が話題になり、大学院生の数が急激に増えていた韓国と日本の若手同士が交流をする機会を作ろうということになりました。そして急遽組織された世話人は約半年の間に韓国と中国の若手に連絡を取り、合わせて20名が来日するところまでこぎつけました。夏の学校での「国際セッション」では、各国の天文学研究の状況や若手の研究環境について紹介し合い、今後も交流を続けていくことで合意したのです。

昨年の交流会のとりあえずの成功は、我々世話人にとって大きな励みとなりました。我々は、第2回の交流会をさらに実りあるものにするため、昨年秋より着々と計画を練って来ました。

何もかも初めてだった昨年に比べ、今年はその経験を元に比較的順調に準備が進みました。韓国・中国の若手とは昨年の参加者を通じてかなり早くから連絡を取り合うことが出来ましたし、さらに台湾の若手が参加することになりました。最終的に韓国から17名、中国から7名、そして台湾から3名の参加者が来日しました。

夏の学校での国際セッションは、7月26日午後

と翌日の午前中に行なわれ、100人を越える参加者を集めました。自己紹介を目的とした昨年に比べ、今年はいよいよサイエンスに重点を移し、セッションでは各国から1～2名の代表が各自の研究発表を形式にしました。日本からは東大天文センターの白田さんと宇宙研の藤本さんが発表しました。聞いていて、彼らの英語での発表のうまいことに驚きました。もちろん日本代表の2人の発表は素晴らしかったのですが、日本の学生の平均と比べて、彼らが同じ非英語圏の学生であるとは思えませんでした。このあたり、我々ももっと努力するべきなのでしょう。また通常の夏の学校のポスターセッションに外国人も参加し、お互いの研究について議論できるようにしました。この為、日本人の発表者にポスターなどを英語で書いてもらうようお願いしました。一部に多少の問題はあったものの、参加者のほとんどがこれに協力してくださいました。

夏の学校は交流の場でもあります。夜には日本の学生と酒を酌み交わし、いろいろな話題に花が咲いていました。また、有志は早朝にサッカーやドッジボールで遊んでいたようでした。

夏の学校終了後は、木曾・野辺山そして宇宙研の見学ツアーの後、全員無事帰国しました。

最後になりましたが、夏の学校と合わせて資金援助をいただいたスタッフ・学振の皆さまと天文台・基研の両機関、お忙しい中施設見学をさせていただいた宇宙研・野辺山・木曾の方々、ホームステイのホストを引き受けて頂いたスタッフ・学生の皆さま、そして夏の学校の事務局・座長の皆さん、その他ご協力いただいた総ての方々、世話人一同厚くお礼申し上げます。

(文：山村)

東アジア若手交流会世話人

早野裕，多賀正敏，土井靖生，高見道弘，大仲圭一，児玉忠恭，山村一誠(以上東大天文)，能丸淳一，林正彦(国立天文台)